

バッグの修理

友人のバックの修理を写真で記録しました。



友人が大切に20年来使ってきたバッグで、Snake Proof Boots に使う革で出来ているということです。Snake Proof Boots というのは、ガラガラヘビに噛まれても大丈夫というブーツのことです。しっかりした革で、流石の貫禄です。

友人の言葉。「20年使ってきたけれど、あと10年は使いたい。その後息子が使いたいとも言っている」

で、心してバッグをみることに。



まずは両側のD環がすり減って、今にもちぎれそうです。よほど使い込んでいますね。感動です。D環は交換しなければなりません、ついでにD環を取り付けている革が伸びてきているので、ここも補強材を入れましょう。

次に、持ち手です。



持ち手のベルトが伸びて、だらしなく垂れ下がります。ところどころほころびもあります。革がだいぶ痛んできているので、ばらして中に補強材を入れて縫い直します。



カバンは全体に革が随分痛んでいて、すり切れ、ギズ、色あせなどがあります。けれど、そうしたものは年月が刻んだ味であるとも言えるので、なんでも新しく取り替えてしまえばいいというものではありません。取っ手の革も新しいもので作りなおすのではなく、今の革をそのまま再利用して修理します。

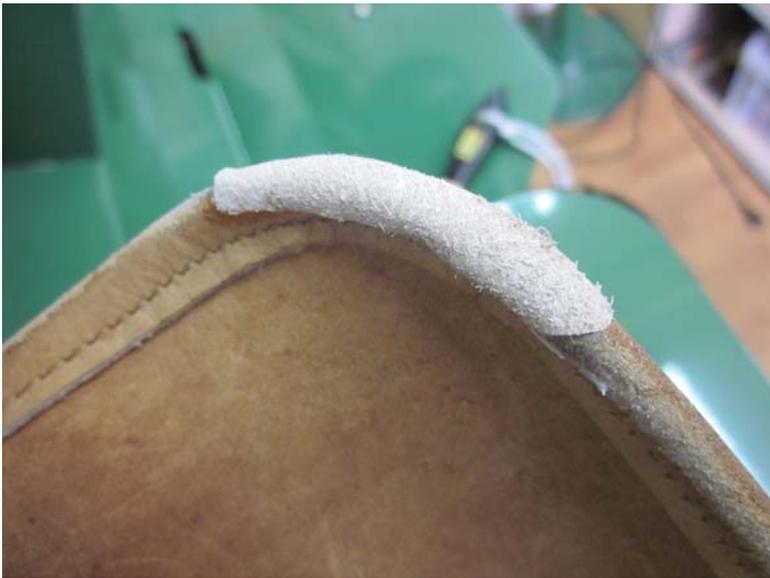
革のへりがところどころすり減っていますが、底の四カ所が特にひどく、穴が開いているので、ここは補修しましょう。



修理方針です。こうしたラッピングやパイピングは普通その部分を切り取り、新しい革で作りなおすことが多いと思います。けれど、出きるだけ今の雰囲気留めるという方針に従って、別のやり方をする事にします。この件は、店長会議でみんなの意見を色々聞き、それを参考に新しいやり方に挑戦します。

修理手順

まず、底のラッピングの穴の部分に、巻革用の革を裏返して貼ります。表の銀は削っておきます。



ボンドは風合いを残すために、手芸用ボンドを使用しました。結果としては色を厚塗することになったので、靴用のボンドでも良かったと思います。



四カ所貼っておいて、

ボンドが完全に乾くまで他の作業をします。

まず取っ手をばらして、ベルトの中に 2cm 巾のベルト芯を仕込んで、



さらに取っ手部分の革を当てて縫います。あっ、写真を撮るのを忘れた！！
まあ、それくらいのおなじみの手順で、これはあっという間に終わりますね。



裏から覗くと、隙間にベルト芯が覗きます。取り付けると見えない部分なのでこのままにします。

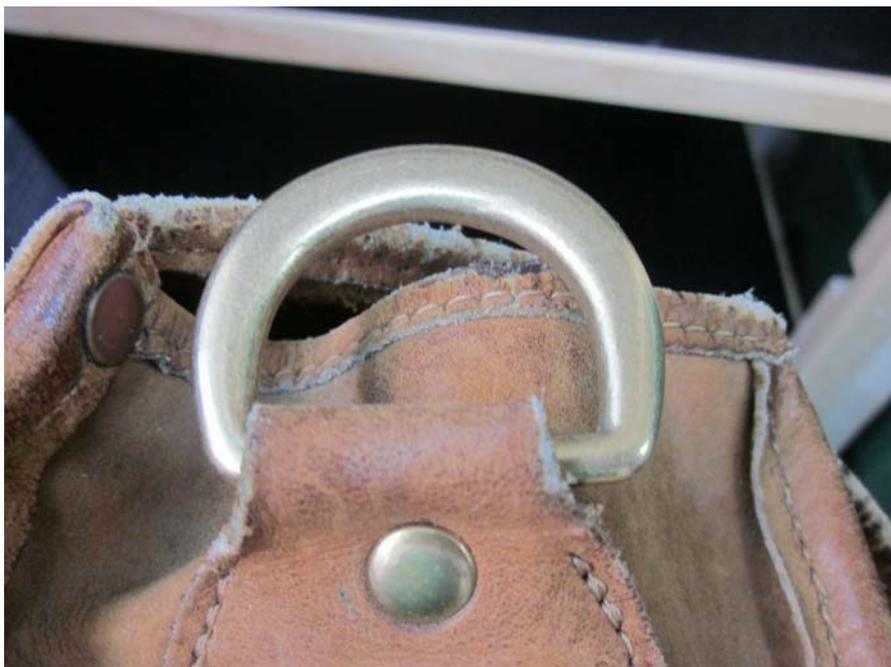
補強材にベルト芯を使うのはあーる工房のオリジナルです。普通のバッグ屋にはない発想ですね。

ぶら下がっても切れないほど丈夫で、加工のしやすいスグ

レモノです。

次にD環の取り替えです。

付いていたD環は、肉厚の重厚な感じのものです。基本在庫のD環では雰囲気合いません。お休みの日に蔵前を散策し、雰囲気の良いD環を手に入れました。こういったところもこだわりですね。普通はドゥさんに頼めば手に入れてくれるでしょう。



ここにも中にベルト芯が補強材として仕込んであります。

カシメは足長カシメの中です。

穴補修

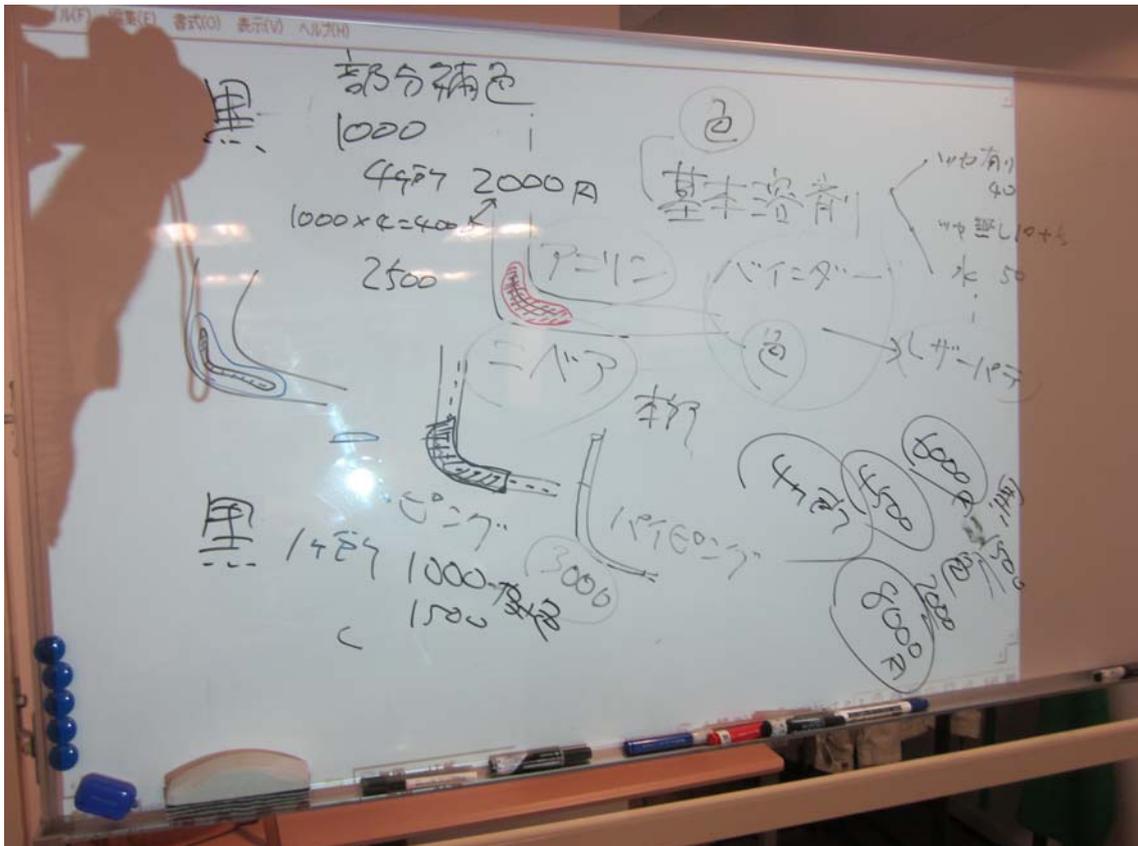
さて、そろそろ貼りつけた革が乾いたころなので、穴補修の仕上げに取り掛かります。

接着した革の周囲をペーパーで削り、できるだけ段差がないようにします。



次に穴補修の部分の色塗りです。

色塗りに関しては、前述のように店長研修会で話し合いをしました。まず、色塗りに何を使うかです。部分補色などに使う染料を使う方法。



1 部分補色などに使う染料を使う方法。

バインダーに色の染料を混ぜて調色をします。

革の継ぎ目の段差が目立つ場合はレザーパテで埋めます。その時、パテにも色を混ぜておきます。

パテが乾いたらサンドペーパーで整え、バインダーを塗ります。

基本溶剤を塗って固定します。今回の場合はツヤ無しがいいので、基本溶剤の割合を少し変えます。

標準は ツヤ有り 40 ツヤ無し 10 水 50 そこにツヤ無しをプラス 5

この方法だと、パテ、調色などの手間を考えると、黒 1500 円、色物 2000 円。

2 アドカラーを使う方法

アドカラーのほうが圧倒的に色塗りは簡単です。ただし、アドカラーは革の表面に膜を貼るので、曲がったり折れたりしてよく動く場所、伸び縮みする場所には適しません。また、革の銀がしっかりしている場所には色が乗りません。この場合は革の表面がすり減っていることと、折れ曲がったりする場所ではないので、アドカラーで行けそうです。アドカラーなら、黒 1000 円、色物 1500 円で十分です。

今回はアドカラーを採用しました。

三通りの方法を想定して、試験的に行います。

まず、アドカラーを水で薄めて、下地をいかしたしあげをしてみます。この方法では、貼りつけた革がくっつき目立ってダメでした。

次にあまり水を使わずに厚塗りをします。色はいいのですが、やはりパッチした革の境界が消えません。ペーパーで薄くしたのですが、やはり限界があります。ほんの僅かですが境界が判別できます。場合によってはこれで十分かもしれせん。

最後に、一端塗料をペーパーで落とし、境目にパテを塗ります。



パテを直接筆に取り、境目を中心に塗っていきます。よく乾いたらペーパーで面を整えます。

その後、アドカラーで色塗りをします。使った色は、黒、濃茶、キャメル、黄、青、アイボリー。パテを塗ってあるので、どうしても厚塗りになります。厚塗りだと塗料の膜がツヤを出すので不自然になります。それを防ぐために、アドカラーがよく乾いたら、ペーパーを掛けて、表面に自然なざらつきを出します。



最後に取り手をカシメで取り付けて完成です。



今回は色塗りで色々試したので、少し時間がかかりました。最初から三番目のやり方で仕上げると、二時間程度の作業内容でした。

パイピングの修理は一箇所 3000 円ほどかかり、何箇所もやると高額になってしまい、受注出来ないこともあるかと思います。また、構造によっては、ひっくり返しての作業ができず、作業不可でお断りすることもあったかと思います。

今回の方法だと、上から革を貼って色を塗るだけなので、手軽に加工することができます。料金も安く提案できるので、こちらもおすすめ出来れば受注できる確率が上がると思います。ただし、パテの取り扱い、調色など、ある程度の訓練は必要だと感じました。